

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 10 NO.2

(通巻 41号)

昭和59年2月1日発行

編集・発行人 高橋 在久

〒 260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8 3 1 1(代表)



浅井 忠「農夫帰路」1887 (ひろしま美術館蔵)

この作品は、明治二十年(一八八七)の東京府工芸品共進会に出品された画壇デビュー作というべき初期代表作のひとつである。脂色を主調とし、

農作業を終え家路につく様子を、浅井としては珍しく人物構成を目的として描いている。だが人物には動きがなく硬く、構図もカメラ・アイ的である。

同時期の作品である「春畝」「農人」の基となったと思われる写真が確認されている今日、写真を基とし描いていることは間違いない。

千葉県立美術館開設十年記念

特別展 浅井 忠記念賞展

会期 昭和五十九年一月十四日(土)〜二月二十二日(水)

本館は、今年度開設十年を迎え、開館以来、佐倉藩出身で近代日本洋画の巨匠として多くの業績を残した浅井忠の作品や資料収集に努力してきた。

このたび、開設十年記念事

業として、浅井忠記念賞を設定し、全国公募による秀作に賞を贈り、その受賞作及び入選作を展示し、現代美術の振興に資することにした。

同時に、浅井忠の秀作を展観し、その業績を回顧し認識する機会とするため、リアリズムの追求を主題とした特別展、「浅井忠記念賞展」を開催することになった。

全国公募

ている。

油彩画、水彩画、版画等の洋画系の平面作品で、リアリズムの追求を主題にした作品を、公立館では全国初の全国公募したところ、北は北海道から南は沖縄県まで、全国から455点の力作が寄せられた。

応募状況を地域別にみると

大賞に松本氏(奈良県)

応募作品455点の中から同展審査会(会長嘉門安雄氏、ブリヂストン美術館長)によって、95点が入選作品として厳選され、続いて大賞(賞金一〇〇万円)及び優秀賞(各五十万円)の審査に移り、その結果、奈良県在住の松本秋美氏(奈良県大和郡山市稗田)

の作品「aspettare」が見事大賞の栄誉を得た。

この作品は、タテ181・8

代文明を象徴的に表現している点にあると思う。この発想のヒューマンな詩情が、一見無機的な外見のこの作品に新しいリアリズムの開拓を感じさせる。大賞にふさわしい秀作であろう。」と述べている。

また、優秀賞3点は次の通りである。

優秀賞

○「絵画」

高森登志夫氏

(習志野市鷺沼台)

○「時の跡」

斎藤 寅彦氏

(市川市東大和田)

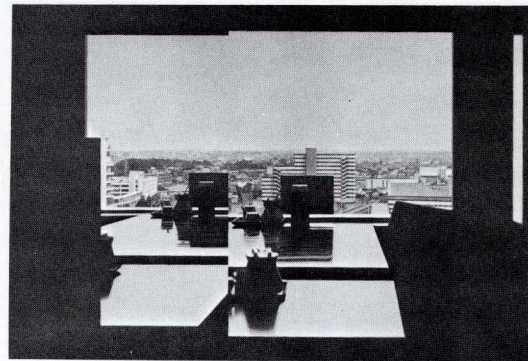
○「海辺の光景」

斎藤 捷夫氏

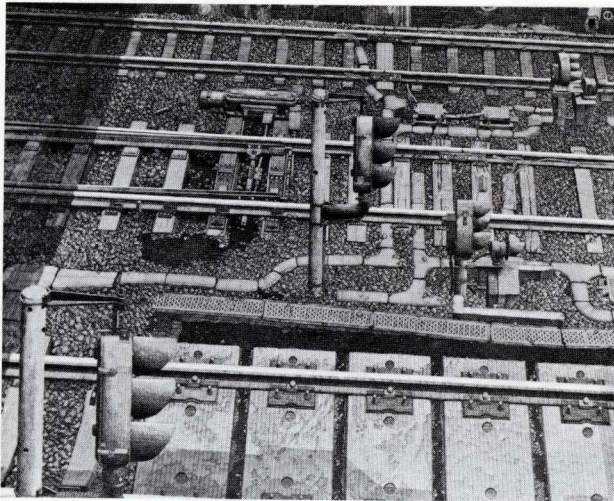
(佐倉市八幡台)

cm、ヨコ227・3cmの大作で、審査員のひとり植村鷹千代氏(美術評論家)は、「駅の構内の線路を俯瞰的な構図でサインペン(?)による細密な線描技法で克明に描き上げた画面である。きわめて丹念な写真であるが、同時に構図の感覚も明快・清潔である。

この作品のもつリアリズムの特色は、細密な写真技法だけでなく、人間の願いや喜びや悲しみなどの生活のドラマを無言のレールに託して、現

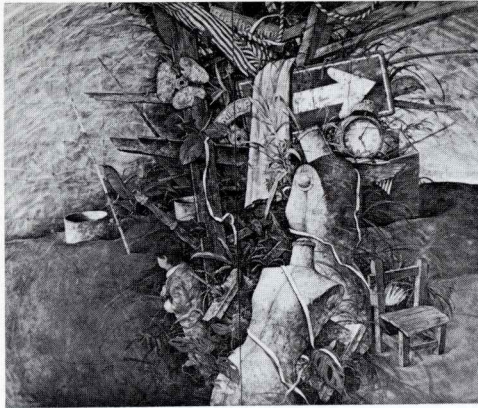


「絵画」高森登志夫



大賞「aspettare」松本 秋美

本展は第一部公募作品展と第二部浅井忠作品展の二部構成で企画され



「時の跡」 斎藤 寅彦

この既成洋画壇とは全く無縁だった「中年新人」ともいえる作者が、その現住所を、浅井忠の出身地(佐倉市)と同じくしたのも偶然で更に緑り深く、今回の同記念賞展の開催意義を倍増したように誠心慶ばしい」とそれぞれ評している。

少しずらして重ね合わせたもので、ちょっとそれと気づかせない変化の面白さもすて難い。これからの飛躍が期待されよう。」と評し、斎藤寅彦氏の「時の跡」について、審査員桑原住雄氏は「題名が暗示するように、過ぎ去ったものへのレクイエムであろうか。過ぎ去ったものとは、遠い少年時代の日々であり、己れの内面に刻まれた悔恨と愛惜の譜である。横長の画面のなかほどに「時の跡」を証明する物体が集積されている。洋裁の人台二体を中核に木のイス、眼ざまし時計、矢印の標識、観葉植物

物などが重なり、その陰に埋もれたように少年が佇んでいる。よく描きこまれた線の要素の強い秀作である。」と評し、斎藤捷夫氏の「海辺の光景」について、審査員中村傳三郎氏は、「波頭をはるか沖にのぞみ、引き潮時の広々とした渚の光景を、けれん味なく平明に真正面からとらえて完璧である。時流を超越した、いわゆる大気遠近法による写実表現だがその地味な固有色のグラデー

浅井忠記念賞贈呈式

去る一月十四日(土)、同展が



「海辺の光景」 斎藤捷夫

オープンした日の午後二時より浅井忠記念賞の贈呈式が来賓、関係者を招いて行われた。大賞、優秀賞が贈呈されたあと、本館館長より「本展が開催されることになったのは誠に感慨深い。出品者に感謝するとともに、受賞者に心からお祝い申し上げたい」とあいさつ。受賞者を代表して松本氏が「栄誉ある賞をいただきうれしい。今後は、この賞に恥じぬよう精進したい。」と述べた。

なお、受賞作品は、それぞれ本館所有となった。

浅井忠の作品展

第二部は、浅井の作品が展示されているが、洋画は国の重要文化財に指定されている「春畝」をはじめ、油彩、水彩、素描など57点、日本画は軸ものなど12点、工芸は茶器、花瓶など7点、彫塑はテラコッタなど6点、その他、スケッチブック、日記、書簡・はがきなどの資料も展示してあり、浅井の幅広い芸術を見るこ

とができる。

〈洋画〉

- ・ 沢入駅 (水彩)
- ・ 農夫帰路 (油彩)
- ・ 室内 (油彩)
- ・ 薬屋根 (油彩)
- ・ 春畝 (油彩)
- ・ 少女 (水彩)
- ・ 旅順戦後の搜索 (油彩)
- ・ 房州海岸風景 (油彩)
- ・ フォンテンブローの夕景 (油彩)
- ・ グレーの洗濯場 (油彩)
- ・ グレーの柳 (油彩)
- ・ グレーの秋 (油彩)
- ・ グレーの塔 (水彩)
- ・ グレーの橋 (水彩)
- ・ 樹下の女 (油彩)

- ・ 縫いもの (油彩)
- ・ 京都高等工芸学校の庭 (水彩)

- ・ 安治川風景 (油彩)
- ・ 奈良の鹿 (油彩)
- ・ 若王子風景 (水彩)
- ・ 婦人像 (油彩)

〈日本画〉

- ・ 田植之図 (絹本着彩)
- ・ 琵琶法師 (絹本着彩)
- ・ 千鰯 (紙本着彩)
- ・ もろこしと鳳仙花 (絹本着彩)

〈工芸〉

- ・ 猿蟹合戦図茶器 (陶器)
- ・ 農家風俗画手塩皿 (陶器)
- ・ 菓子器 (陶器)

〈彫塑〉

- ・ 仙人(羅漢)(テラコッタ)
- ・ ライオン(テラコッタ)
- ・ 蓼仙人(陶彫)

入場料

- ・ 一般五百円(三百円) 高・大生三百円(二百円)、小・中学生二百円(七十円)

(一)内は20名以上の団体料金
なお、学校長の申し込みにより観覧する場合は、高校生70円、小・中学生は50円となります。

- ・ 開館時間 午前9時～午後4時30分(ただし、特別展の入場は4時まで)
- ・ 月曜日休館

審査を終わって

審査員会長 嘉門 安雄
(ブリヂストン美術館長)



浅井忠記念賞展を銘打った今回の公募展は四五五点の応募作を得た。この数は、見方によっては、多いとも、あるいは少ないとも、とれようがもちろん、ここでは単なる数量を問題にするつもりはない。最初の試みだけに、応募者側に幾分の戸まどいのあったことは事実であろう。第一、リアリズムという言葉の受けとり方においても異なるであろうが、結果として、いわゆる抽象風表現の作品が意外に少なかったことに、私はやや意外性を感じるのである。応募者は、私などが考える以上に状態判断に敏感なのであろう。しかし、このような、それこそ抽象的独白は別にして、応募した四五五人の作品（一人一点）は、大別して二つに分けられる。一つは地元県を中心に、ほぼ日本各地から万遍なく集まった作家たちの作品であり、他の一つは、必ずしも画家としての道を歩み出したとは言えぬ地元の若い人々たちを中核とする人びとの出品である。はっきり言って、プロとアマが半々であった。このことは、いいとか悪いとか、また、展覧会そのものを

見つめる熱意云々ではなく、まさに、どのような意味においても、初めての公募展につきまとう今日の一般状況とも言えよう。したがって、応募作品数ではなく、その質の問題になるのである。幸い、全体として決して低レベルでなかったのは何よりである。さて、入選作を中心に全体を省みると、決して低レベルではないが、やや活気と個性のひらめきに乏しいのである。これは、現在のわが国美術界一般の情勢ではあろう。みんな利口になっている。スタイルは具象であれ、抽象であれ、せめてコンクリートの場では、もつと大胆なもの、作家の熱いぶきのきこえるものを常に夢みるのだが、それは、作家でない私の感傷なのであろう。とにかく破綻なく描くこと、まとめることに細心すぎるように想える。表現というより、描くこと、作ることに重点が置かれすぎている。だから、破綻も少ないかわり、破綻もない。破綻は破綻とは違う。言うまでもなく、破綻は乱調ではない。ましてや、乱暴でもなければ、下手でもない。表現する心の高鳴りである。

わかりきったこと、よけいな言葉を羅列してきたが、どうも、としとともに気短かになって、夢を追いつぎよう。現実にかえよう。

現実にかえてみると、今回のこの公募の入選作——その中でも、賞候補段階にまで絞りこんでみると、流石にそれなりの発言をしている。はじめてのコンクリートの質としては決して他に見劣りがしない。慾を言えば、前述の愚痴につながるが、とにかく、いずれも自己の世界を創り出しており、見る人に話かけてくる。

特に、大賞の松本秋美君の作品は、その緻密な観察と描写が、見事に深い呼吸のリズムに統一されて、一つのロマンを奏でている。平板に、あるいは羅列になりがちなもの、こまめに描くところ、豊かにした力価と心のときめきの表現を高く評価したい。一方作風こそ違いますが、高森登志夫君の出来栄えも大賞作に劣るものではない。審査の折も、この二作はほとんど甲乙つけがたいとの全員の意見であったが、たしかに、新鮮さ、視点の明快さにおいて魅力に満ちている。敢えて言えば、思

考がやや先行し過ぎたと言えよう。

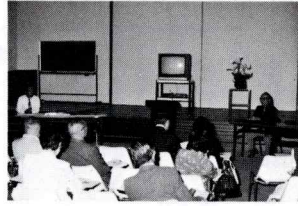
さらに、高森君とともに優秀賞になった斎藤寅彦君の、地味ではあるが、描くということをだいにし、また、よく知っており、しかも画面にただよう健康感。斎藤捷夫君の対象とのしっかりした対話ぶり等々……。私が言葉にすれば、すべて抽象的になってしまいが、以上の四点は、なんとと言っても今回の大きな収穫である。そして、また、この四点とともに、賞候補として最後まで残った計十二点を得ただけでも、今日の情勢下において、この公募展は成功だったと言いきれるのである。最後に、もう一度全体を概観すれば、いわゆる油彩類は発想もモチーフも幾分狭く、似たりよつたりのものが多い感じであり、版画は出品数は少ないが、中に、努力と気構えのしっかりしたもの、数点があり、水彩は総じて平板で、無感動だった、とつけ加えておく。

* * * *

「浅井忠記念賞展」公募作品入選(入賞)一覧

No.	作 品 名	作 家 名	No.	作 品 名	作 家 名
1	蟹 殻	前 窪 幸 二	47	道化の刻	小 島 鐵 男
2	現 状 '83	白 尾 勇 次	48	逆 立 ち	鈴 木 明 夫
3	桜	江 崎 充 隆	49	私のコーヒーブレイク	大竹山 規
4	LA TARDE (昼下り)	渡 辺 芳 樹	50	ピ エ ロ	志 摩 じゅん
5	土	松 本 明 也	51	静 かな 時	山 口 和 雄
6	耳袋(鳥は食うでもトリ食うな)	太 蛾 亜 美	52	海への幻想	稻 田 年 行
7	二人居る部屋	吉 岡 正 人	53	北国の落日	船 越 一 人
8	人と物(刻の構図)	土 嶋 敏 男	54	SHE MAKES IT BETTER ?	島 田 裕 之
9	醸造蔵のある風景	宮 沢 昇	55	静 物	高 野 雅 彦
10	川 光 る	竹 内 庸 悦	56	河沿いの街	安 益 耕 平
11	房州花表裏	野 村 保 夫	57	羅 漢 一 人	森 家 要
12	静物・Composition	三 橋 文 彦	58	午 後 の 刻	生 駒 泰 充
13	濤	清 水 光 子	59	聖 家 族	岬 和 男
14	おんな達	彦 坂 建	60	毬 少 女	梶 木 高
15	ガードレールに囲まれて	佐々木 俊 介	61	UNA DONNA	桜 井 晨 正
16	流動するもの 1983	前 川 謙 一	62	あ・い・う・え・お	片 山 洋 一
17	風 景	中 村 学	63	二 月	小 林 宗 二
18	舟 小 屋	中 谷 時 男	64	壁の前の静物	藤 田 西 洋
19	神 話	宮 坂 健	65	帽子の女	蛭 田 均
20	海からのたより	紺 野 五 郎	66	ブラインド (II)	金 石 出
21	成 田 郊 外	久 保 博 孝	67	Yo no soy turista 私は観光客ではない	広 田 百 合 子
22	風姿・九十九里	根 本 忠 緒	68	霧が峰高原	岡 本 透
23	重力場について	沢 田 英 治	69	真冬の街並	高 橋 利 藏
24	地に還るもの	北 山 寛 一	70	寡 黙 II	五十嵐 公 江
25	屋根のある風景(ベニス)	中 村 一 良	71	露 店	荒 木 尚
26	西 風 来 迎	智 内 兄 助	72	晩秋の高原にて 1983	高 鬼 子
27	残 照	原 三 郎	73	真 理	斎藤 ヤスヒロ
28	竜のハナ唄	庄 田 常 章	74	太陽のない風景	大 槌 隆
29	ANNIVERSARY DAY	福 田 建 之	75	壁	畠 山 誠
30	夜空の擬態	菊 池 敏 之	76	晩 い 夏	中 島 祥 子
31	歩 (石連作)	安 永 元 典	77	ミューズの園	佐々木 壮 六
32	夢 現	峰 尾 幸 仁	78	樹	小 泉 正 彦
33	風 の 風 景	森 一 浩	79	響	田 崎 末 満
34	呪術師の森	佐 藤 昌 宏	80	三 月 B	山 信 田 稔
35	わらべ詩	池 田 征 史	81	進化ブラン	瀬 川 富 紀 男
36	室 内	松 岡 滋	82	ある看板からのメッセージ	井 上 公 子
37	孤独の体系	館 野 弘	83	卓上のパラダイス	安 盛 孝 一 郎
38	パースデエイ・レイン	森 田 康 雄	84	さすらう人	瀬 川 明 甫
39	大地 (土に聴く)	平 岡 靖 弘	85	ある 風 景	星 加 哲 男
40	風 光	保 坂 晶	86	巷の祈禱師(キャンペーン)	熊 谷 文 利
41	朵 (さい)	大 塚 利 典	87	転位 '83-地-IX	中 林 忠 良
42	作品 '83-2	吉 野 順 夫	88	Landacape	浜 松 繁 雄
43	一人だけの風景	玉 川 信 一	89	黙 示 録	城 戸 清 登
44	男と女その“イ”	安 達 博 文	90	卓上の緻密	宮 澤 篤 志
45	チンチョンに捧げる	土 屋 貢 一	91	早 春 譜	木 下 誠 一
46	Stairs-8	石 井 精 一			

ごあんない



◎第10回放送セミナー

- ・期日 2月18日(出)
- ・時間 午後2時より
- ・会場 本館研修室
- ・講師 田中 稷氏
- ・テーマ (美術評論家)
NHK教育テレビ「日曜美術館」より
- ・会費 無料

団体展 (2月～3月)

- 群鷗書人展
1月31日～2月5日
- 親子絵画展
1月31日～2月5日
- 第36回千葉県小中学校書

初展

- 1月31日～2月5日
- 第18回千葉大学学生書道展
2月7日～2月12日
- 千葉大学教育学部美術科卒業制作展
2月7日～2月12日
- 第8回葉美会展
2月7日～2月19日
- 第9回千葉県民写真展
2月14日～2月26日
- 子ども造形展
2月14日～2月19日
- 雁鴻会展
2月21日～2月26日
- 幕張北高校書道コース卒業制作展
2月21日～2月26日
- 千葉市展15周年記念特別展・千葉市民美術展覧会
2月28日～3月18日
- 第31回書星教育部展
3月20日～3月25日
- 第7回唱和会書展
3月27日～4月1日
- 自然保護写真コンクール入賞作品展
3月27日～4月1日
- 弥生書道展
3月27日～4月1日

トピックス

第2回美術講演会

特別展「浅井忠記念賞展」にともなう第2回美術講演会が去る1月22日(日)午後2時より「県民アトリエ」研修室において、講師に読売新聞「日本の四季」を担当されている芥川喜好氏を招いて行われた。

「日本の四季」と浅井忠」と題して、浅井の作品について取材しながら感じたことについて話されたが、特に氏は、浅井の作品、なかでも「春畝」の中で描かれている人物のポーズや、「葦屋根」の前景・中景の人物の配置・遠景の処理等は、写真をもとに描かれたものではないか、さらに、「農人」(二八九〇年作)の中の人物は明らかに写真をもとに描いたものであるという。しかし、そのことが重要なことではなく、浅井の作品には、写真にはない「土のにおい」があり、情感がある。写真よりイメージを借りたとしても、写真をはるかに卓越している点が重要なことであると話された。

氏はまた、浅井のヨーロッパ

バから帰国後の京都時代について、一つのなぞであるという気持ちやぬぐいきれないが洋画に対する絶望とか、画壇に対する絶望があり、常に絶望と隣合わせに生きたように思われ、そういう浅井がまた魅力であると結ばれた。

第三回美術館協議会

去る1月26日(木)午後2時より、本年度第三回美術館協議会が本館会議室で行われた。主として、「浅井忠記念賞展」について話し合われたが今後とも継続して開催すべきであるとの意見で一致し、今後は、作品募集について、趣旨の徹底、募集範囲、審査員等について検討すべきであるなど、活発な意見が出された。次回は3月16日(金)の予定。

日誌抄

- 9月 3 特別展「日本の洋画とフランス」始まる
- 18 第一回美術講演会 講師 三木多聞氏
- 20 移動美術館(八街町)
- 10月 1 移動美術館(四街道市)
- 8 第3回美術を語る会

職員異動

昭和58年12月31日付けで、次の職員の異動がありました。

◆退職者

山内章子(学芸課)

ごくろうさまでした。

- 11 第一回美術館研究員会議
- 12 特別展終る
- 11月 11 第二回美術館協議会
- 12 県展35周年 美術館10周年記念碑除幕式
- 30 千葉県博物館関係職員研修会
- 12月 9 浅井忠記念賞展公募作品審査
- 10 第四回美術を語る会
- 14 講師 村田哲朗氏
- 14 展示室利用に伴う調整会議
- 1月 14 特別展「浅井忠記念賞展」始まる
- 22 浅井忠記念賞贈呈式
- 26 第二回美術協議会
- 26 第三回美術館協議会